



《獸頭人身十二薬叉大将立像石膏原型（丑）》（2019 年）

椎名勇仁 可塑圏：ねん土的思考
Shiina Takehito *Plastikosphere: Clay-like Thinking*

せんだいメディアテーク6階 ギャラリー 4200

2024年11月2日(土)～2025年1月13日(月祝) 66日間

11:00～20:00 一般 500円 高校生以下 無料

- ・ 11月28日(木)は休館、12月29日(日)～1月3日(金)は年末年始休館
- ・ 65歳以上の方、障がい者手帳をお持ちの方と介添者1名は半額
- ・ 学生証、運転免許証、健康保険証など年齢を証明するものが必要です。

主催：せんだいメディアテーク(公益財団法人 仙台市市民文化事業団)

助成：一般財団法人 地域創造

協力：群馬県立近代美術館、北海道立埋蔵文化財センター、株式会社ODレーザ

後援：tbc東北放送  ミヤギテレビ khb東日本放送 河北新報社 朝日新聞社仙台総局
読売新聞東北総局 毎日新聞仙台支局 産経新聞仙台支局 日本経済新聞社仙台支局
仙台リビング新聞社 せんだいタウン情報S-style  仙台シティエフエム ラジオ3

○お問い合わせ

せんだいメディアテーク

企画・活動支援室

〒980-0821

仙台市青葉区春日町2-1

tel: 022-713-4483

fax: 022-713-4482

office@smt.city.sendai.jp

http://www.smt.jp

○展覧会サイト →



○アクセス

地下鉄南北線＝勾当台公園駅下車、「公園2」出口から徒歩7分

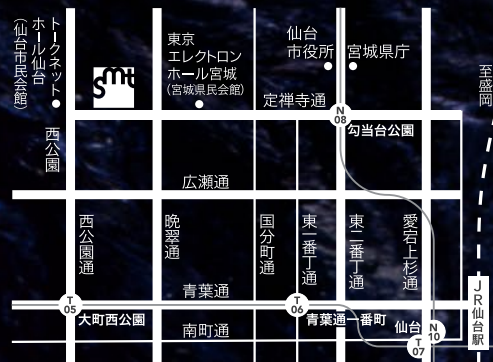
地下鉄東西線＝大町西公園駅下車、「東1」出口から徒歩13分

仙台市営バス＝仙台駅前60番(仙台TRビル前・地下鉄仙台駅「中央2」出口前)のりばから

「定禅寺通市役所前」経由「交通局大学病院」行き約10分、メディアテーク前下車

このチラシはリサイクルできます。

表紙作品 《浮き輪の子》(2000年)



Plastikosphere
椎名勇仁
かそけん
可塑圏
ねん土的思考
Shiina Takehito
Clay-like Thinking

2024.11.2～2025.1.13
sat
mon



《獸頭人身十二薬叉大将立像石膏原型（寅）》（2022 年）

椎名勇仁 可塑圏：ねん土的思考

わたしたちにとって粘土は、クレヨンと並んで幼児期に触れる最初の表現媒体ではないでしょうか。柔らかく自在に状態を変え、どんな形にすることもできる粘土の性質を「可塑性」といいます。それは魅力的ですが、成長とともに粘土の遊びに没頭することは少なくなっていくものです。仙台にゆかりの美術家、椎名勇仁は、そうした粘土の性質に関心を持ち続け、塑造を中心とした表現活動を20年以上続けてきました。

活動初期の1990年代末には、粘土だけでなく日用品や食べ物など、多様な素材で可塑性を確かめる実験を繰り返します。やがて、水分次第で自在に状態を変化させる粘土が、焼成によって可塑性を失うことから、粘土を不可逆な時間の隠喩として捉えるようになります。2000年代に入ると、粘土の起源を遡るように塑像を活火山へ持ち込み、その熱で素焼きする〈火山焼〉のシリーズを開始しました。火山から生まれた岩石が、風化して粘土になるまでには、数万年から数百万年の膨大な時間を要するとされます。焼成によって溶岩をまとった物体は、その長い時間を越えた可塑性の循環の象徴なのです。椎名は、火山を媒介とすることで、人の身体や時間の認識から大きく逸脱し、粘土の性質を観念的に継続させています。そして、この火山焼にとどまらず、椎名の表現とは、かたちを変化させる技術を駆使して、ものごとの成り立ちや因果性を物語る試みだといえるでしょう。

この展覧会では、初期の作品から、現在制作中の「十二神将」のシリーズまで、椎名の活動の成果を年代記のように配置します。会期中には、過去に失われたいくつかの作品が粘土で再制作されて展示に加えられ、展示空間全体が、椎名による可塑性の圏域＝可塑圏として構成されます。そして、その展示空間は、仙台で活躍するデザインチーム「建築ダウンーズ」が設計します。

21世紀に入りわたしたちの社会は、デジタル技術への依存を高め、数値で示される正しさの前に、寛容さを失い硬直化してはいないでしょうか。個人もまた、ビッグデータをもとに類型化され、平均化された数値的な存在として扱われようとしています。あたかも可塑性を失いつつあるようなこの社会のなかで、椎名の手さぐりの探求は、正解に囚われないことの大切さや、数値ではない「わたし」のかたちと重さを気づかせてくれるはずです。その長い道ゆきを本展でご確認ください。



《巨人》(2001年)



《ロボットの散髪》(2002年)



《二心同体》(2003年)



《鬼ゴールド／ロザリオ》(2010年)



《Beppu 1》(2010年)



《二十四の瞳 (六の瞳)》(2009年)



《三角暗号》(2010年)

○ギャラリーツアー

展示作家と担当学芸員による解説ツアーです。展覧会場を来場者と一緒に回りながら、作品の解説をします。

11.9(土)、23(土)、12.7(土)、21(土)

6階ギャラリー 13:00～15:00

- ・参加人数20名程度、申し込み不要、直接会場へ
- ・展覧会の入場料が必要です

○トークイベント

展示作家とゲストによる対談です。美術評論家の榎木野衣氏と宗教学者で美術家の君島彩子氏を招き、椎名勇仁の表現について考察します。

11.9(土) 椎名勇仁 × 榎木野衣

12.21(土) 椎名勇仁 × 君島彩子

7階スタジオb 15:30～17:00

- ・参加人数30名程度、申し込み不要、直接会場へ
- ・展覧会入場券(当日分)の半券提示が必要です

榎木野衣（さわらぎ・のい）1962年生まれ。美術評論家。多摩美術大学教授。主な著書に『日本・現代・美術』（新潮社）、『戦争と万博』（美術出版社）、『後美術論』（美術出版社、第25回吉田秀和賞）、『震美術論』（美術出版社、芸術選奨文部科学大臣賞）、『感性は感動しない』（世界思想社）などがある。

君島彩子（きみしま・あやこ）宗教学者。美術家。和光大学講師。博士（学術）。著書に『観音像とはなにか 平和モニュメントの近・現代』（青弓社、2021年）など。論文に「地藏信仰における石と布山形県村山地域における地藏の被服調査から」(2024年)など。企画・監修した主な展覧会に「万博と仏教」、「陶の仏」(いずれも2023年)。美術家としては「山形ビエンナーレ2022」に参加している。

会場デザイン：建築ダウンーズ

菊池聡太郎、千葉大、吉川尚哉によるデザインチーム。メンバーは東北大学大学院都市建築学専攻出身。これまでに、せんだいメディアテークの什器制作や、美術展の会場の設計、木材をめぐるリサーチプロジェクトなどをおこなっている。